トマス・リードの心の哲学（4）

——行為の諸原理について（上）——

石　川　　徹

Abstract

In this paper, we examine Reid's theory of principles of action., especially, mechanical principles and animal principles. And from these we will try to construct his ideas about what human being is.

Mechanical principles are divided into instinct and habit. They may operate without exertion of will and reason. There are three kinds of animal principles, i.e. appetites, desires, and affections. Appetites are grounded on physical conditions of man and their object is to help man to survive. Desires are of social character. They drive man to be social. Affections are the principles of action whose object is other person. We may think they correspond to what out modern usage of the words "emotion" or "passion" mean. It seems obvious that the latter two are peculiar to human being. Why they are called "animal principles"? We can best understand its meaning in contrast to rational principles of action.

And we find Reid's thoughts about what man is, especially, about his affection has very much in common with Hume's thoughts, in spite of their theoretical differences. We can see the deep influence of Hume on Reid.

前論文[1]においては、リードが真の因果性の現れる場所であると考える人間の意志的な行為において、行為がどのような構造を持ち、その中で意志がどのような役割を担っているのかが論じられた。但しリードの論述は、論敵ヒュームの哲学の眼目である因果性批判に対して、全く逆の構想、すなわち主体者因果説を提唱しておきながら、バークリが為しているようなその説についての形而上学的な探究には向かわずに、ひたすら人間の行為の観察に注意を集中しているように思われる。そして、主体者因果説の根拠としては、ほとんど意志の自由を証拠立てることのみによっているように思われる。もちろんこれは、意志の自由を否定するヒュームの論とは全く対立するが、前論文で述べたように、同じく意志の自由の否定論者であるロックとは共通点が多い[2]。そのようなことを考えあわせると、リードの因果論は結局、ヒュームの因果論に対抗するような射程を持っていないのではないかという疑念もわく[3]。しかし、ヒュームにおいても、リードにおいても、その探求の目標が人間本性の解明であるという点、しかもそれが社会の中で日常的な営みを行う人間、とりわけ様々な価値判断と意思決定を行う道徳的主体としての人間の本性の解明であるという点を考えれば、少なくとも、リードが因果論否定こそがヒュームの哲学理論を根本から崩す要諦になると見立てたことは正しかったように思われる。それは、リードによる「観念説」批判の要が、知覚表象説を批判し直接知覚説を立てることであったのと同様である。それゆえ、我々はリード哲学の全体を正しく理解するためには、

彼の因果説の不十分さ（とりわけ因果的ではない必然性をもたらす機構の説明が欠けていること）はひとまずおいて、リードが人間をどのように理解しているかを見ておかなければならない。

『人間の能動的力についての諸論文』のうちの第三論文「行為の諸原理について（"Of The Principles of Action"）」[4]は、前論文で意志が選択意志として規定されていたのを受け、行為に影響する諸原理を枚挙し、考察したものである。しかし、これは同時に道徳的主体としての人間を構成する諸要素を挙げることによって、リードの思い描いている人間像を明らかにしたものとして、解読することができる。本論文ではそのような観点から、このかなり長い論文を取り扱うが、紙面の都合上、その前半部、リードが行為の機械的原理（Mechanical Principles）と呼ぶものと、動物的原理（Animal Principles）と呼ぶものを取り扱う。行為の原理はさらに理性的原理（Rational Principles）が存在するが、前二種の原理とは同じ行為の原理といいながら、幾つかの重要な点で異なっているので、次の論文で別に取り扱うことにする。

1

「行為の諸原理」という第三論文の表題の意味を限定するところから、リードは考察を始める。「人間の行為（actions of a man）」と言ったとき、道徳論において問題となるような意味で真に人間の行為と呼べるものは、人間がそれをなす前に、自分がなそうとしていることを前もって意識し、それを意志したり欲求したりする場合である。しかし、一方で現実の人間の振る舞いを十分に理解するためには、これでは話が済まない。上記のような人間の行為が、まさに人間の行為としての中核をなすものであるとはいえ、人間が現実になしていることのすべてを覆い尽くしているとはいえない。よって、リードは「行為」の一般的な意味として、「自発的（Voluntary）」「非自発的（Involuntary）」「混合的（Mixed）」の三つの下位区分を含むものとして提示する（543）。「混合的」行為については具体例が挙げられてはいないが、おそらくは一旦しようという意志が働いたら、後は非自発的にもなすことが可能な行為、たとえば、普段は非自発的に行われる身体運動たとえば呼吸をゆっくりに、しようとしてみることや、慣れた曲のピアノの演奏のように、一旦始めることを意志すれば、あとは習慣的に指が動くような場合のことを言っているのであろう。

道徳的評価の対象となる行為は、確かに自発的行為のみである、なぜなら自発的行為のみが、道徳的主体の人間の責任に帰すことができるからである。しかし、何故自発的行為のみに道徳的評価を限るかといえば、そこには人間がどのように生きて、そして行為しているのかということに対する先行理解があるからである。その理解によって我々は人間のなす様々な事柄のうち、道徳的判断の対象としうる範囲を限るのである。よって、このように行為を広く取ることは、リードの言うように避けられない「日常的意味（popular sense）」における語の使用というよりは、道徳的行為を問題にしていくうえで、必然的に問題としなければならない人間についての先行理解を明らかにするための、必然的準備作業と考えるべきであろう。

次にリードは行為の「原理（principles）」ということで、我々を行為へと導くあらゆるものを意味するとする（543）。そしてこのような原理がなければ、われわれは何もなしえないとする。先の論文にも述べたように、人間の能動的力の発露としての意志は、選択意志として考えられており、無差別の自由を前提にするものではない。ゆえに人間の精神において働く様々の諸要素が問題となる。このような影響力を持つ多様な要素をリードは「原理」と呼ぶのである。

リードは、この論文において、このような原理を枚挙分類し、コメントを加えていくことに終始する。このような諸原理を体系的に再構築するとか、それらの背後にある形而上学的構造を明らかにしようという試みは全くない。ただこの様な諸原理はすべて造物主たる神によって我々に植え付けられたものであるという信念が述べられるにとどまる。さらには「原理」とい

う言葉が示すように、ここで意志に対する影響力は、少なくとも日常的な意味で因果的なものである。このような影響力の源泉をさらに追求することもしない。このような影響力が自然現象における必然性と同質のものであるかどうかについても言及はない。これらは、リードの哲学に形而上学的構築を求める読み手にとっては、欲求不満を募らせる原因となる。すなわち、リードの論敵としているヒューム哲学に対応する形での哲学体系がそこでは見いだせないからである。この点についてどう評価するかは、リード哲学の全体を見たうえで最終的に決定することとなるが、一つの可能性としては、体系提示というようなやり方にこだわらないこと自体が、リード常識哲学の探究の自覚的なあり方かもしれないということも考えうる。しかし、いずれにしろ、最終結論はまだ先のこととして、リードの言に耳を傾けねばならない。そして、虚心に耳を傾けたとき、体系性を欠いているように見えるここでの論考が、人間本性の解剖学としては、興味深いものになっていることにわれわれは気づく。リードの人間理解がここではきわめて明瞭に示されているのである。したがって、前述したとおり、今回の我々の作業は行為の原理すなわち、我々を行為へといざなう種々の要素を枚挙していくことで、人間がどのような成り立ちを持ち、どのようなものに影響され、またどのようなことを目標として動いていくかという、リードの人間像を描くこととなる。

リードに指摘を受けるまでもなく、我々はこのような諸原理についてある程度知っており、その知識に基づいて、人間の振る舞いを予測し自分の行動に役立てたり、他者の性格の理解をしたりしていることは明白である。ヒュームが、人間の行為も因果的に理解しなければならないと主張するのも、まさにこれが理由である。しかし、一方で、人間の行為を自然学と同じような厳密性を持って、因果的に解読することは現実に不可能である。この不可能性の要因をどう見るかについてから、意志の自由論者の論拠もまた生じる。しかし、リードはこの点には依拠せず、この日常的知識を学問的に厳密にすることの困難さとその原因を挙げる。一つは行為の原理が多種多様であること。そして一つは、異なる原理から同じ行為が生じうるということである。そして、このような困難にも関わらず、学問的な認識を得るためには、自他の振る舞いの注意深い観察と原理の正確な分類と観察が必要であるとする。したがって、この点においては、リードとヒュームは全く意見が一致すると見てよいのである。ここにおいて両者の比較がまさに成り立つ共通の基盤をまず見いだすことができる。

2

既に前論文において、行為の原理の区分は挙げられているが、再び挙げておけば、一切の精神活動を必要としていないように思われる機械的原理（Mechanical Principles）、人間と動物に共通しているように思われる動物的原理（Animal Principles）、そして理性的被造物としての人間に本来的な原理である理性的原理（Rational Principles）の三つである。考察はこの順序で、これらの区分に属する個別的な原理を枚挙していくことで進められる。

機械的原理は本能（Instinct）と習慣（habit）に分類される（545）。前者が、人間本性に先天的に植え付けられているもの、後者が後天的に獲得されたものである。

まず本能についてであるが、この原理が発動されるに当たっては、事前に何らの精神活動も必要としない、つまり、何のためにするとか、どのようにすれば上手くいくとか、を考えることなく、さらにはそもそも何をしようとしているか、何をしているかについての意識も存在しないような場合でさえも、人をある特定の行動に駆り立てる盲目的な衝動である。リードが事例としてあげているのは、新生児の呼吸や食物の嚥下、さらにはある対象に対しての、泣く、恐れるなどの感情的な反応などである。乳幼児についてよく言及されるが、それは彼らがそもそも、精神の作用において未発達であるという条件を持っているので、それ故に本能の持つ性

格が鮮明になるという考えがあってのことであろう。つまり、精神が未発達でも、動物としての我々人間は生存を続けることができるが、それはまさに本能の故であるということになる。幼児期以外でも、食物摂取の内的機構は我々が意識せずとも自動的に働くし、きわめて頻度の高い行動である、瞬きや呼吸などは、意図してある程度コントロールはできるが、たいていは無意識のうちに行われる。また対処を考えている暇もないような危険を避けるような場合には、反射運動が働くが、これもまた一例とされる。要するに念頭においているのは、自律神経系の作用を基礎とする生体の維持活動や、突発事態に対処する反射運動のことだと考えればよい。

しかし、リードはこのような身体運動のみを本能の事例として考えているわけではない。精神活動のある部分もまさに本能なのである。その点を確認しておこう。

リードが挙げているのは人間が他者を模倣する傾向（proneness to imitation）を持っているということである。たとえば、人が新しく住み着いた場所の方言を知らず知らずのうちに身につけていくというような場合である、このような傾向を人間が持っているということが方言や、ある集団や階層職種などに特有な話し方や身振り、さらには国民性の形成などにも影響力があるとする（548）。人間は社会生活を送る中で周囲の影響を受けて人間化されていくわけだが、言い換えれば、このような影響を受けて自分を変化させていく素地を人間は本来持っているということになる。リードはこの点を本能ととらえているわけである。しかもこのような模倣の本能を、信念や判断といった知的な領域においても見られることだとする。すなわち、他者の行動を模倣することだけではなく、他者から受ける教示や情報をそのまま受け取り信じ込む傾向も本能的であると考えるのである。証拠によって信じることが理性によるものであるとすれば、単に他人の証言や権威によって信じることは理性的ではない以上、これは自然の衝動によるものであり本能的であると考えるのである。

この点でリードが本能としているものが、ヒュームの言う共感の作用と一部重なっていることは明白であろう。ヒュームも、国民性などの形成を共感の作用としてあげていて、様々な社会的通念の基礎を共感に求めているからである[5]。また、さらに根源的な本能的信念として、自然の斉一性の信念をリードは挙げていて（549）、その説明として、ヒュームがまさにこの信念を論証することも経験的に立証することもできないものとしている点を正しいとして、本能的な信念としているのである[6]。

知性論に属する議論はこの論文の目的ではないので深入りすることは避けるが、人間の知識の構造や生成に関して両者が極めてよく似た意見を持っていたことは以上のことから汲み取れるであろう。したがって、ヒュームが自然的信念としているものは、すべてが明示されているわけではないが、大半はリードの中で本能的な信念となるのである。もちろんヒュームが自然的信念に関してさらに観念説を前提として論証でも経験的でもない因果的説明によって、解明しようとする点については、観念説を全面的に否定するリードにとってはこのような説明はむしろ有害であったろう。しかし、人間の認識の全体の構造を考えているとき、両者の親近性は明らかである。

機械的原理の第二のものは習慣である。リードによれば、習慣は、頻繁に繰り返されることによって獲得する、あることを行うこと容易さと定義されるが、行為の原理としてはこれだけでは十分ではない。人が行為へと向かう傾向や衝動を与えなければならない。そして、人はそれが習慣であるが故にある行動へ向かうということも観察できる。たとえば、我々が悪習を見につけてしまった際に、それを抑えようとすることは、ただ止めようと一般的に思うことだけではだめである。一つ一つの行為の場面において、その行為を押し留める意志の働きが必要である。完全に悪習がやむのは、それに対抗する習慣が形成されることによってである場合が多い。結局、習慣は単にあることをすることを容易にするだけではなく、それをしないことを不快にするのである（550）。そのことによって、

我々を行為へと導くのである。したがって、それを止めることには意志の作用が必要であり、それをすることには何の意志も要らないということが可能なのである。

人はこの様な習慣を獲得することによって、単なる本能を超えた様々な振る舞いや性格を身につけていく。これがなければ、人間は他の動物のように本能的な行動を逸脱することなく生きていくことになるだろう。そして、個別の習慣は確かに後天的に獲得され、それがどのような形態をとるかは偶然的な条件に左右されることではある。したがって、本能とは区別される。しかし、このような形で繰り返される行為を習慣という形で行為の原理に換え、身につけていくことそれ自体は、人間の本源的な構成によるという以外に説明の仕様がないとリードは考える。言い換えれば、ここでの習慣とは、学習が意識化されない形で我々の身体や精神に取り込まれるということであろう。その意味では確かに、どうして、そのようなことが可能なのかと問われるならば、そのような能力を人間は生来持っていると答える他はないだろう。しかし、また本能や習慣が人間の生の根底を支えているというあり方をリードが強く認識していたということもあらわれているように思われる。これは、当時の他の哲学者に比べても、大いに強調されてしかるべきであると思われる。

3

次に行為の動物的原理についてであるが、これは機械的原理とは異なり意志や意図という精神の働きを前提とするものの、判断や理性という、より高次の能力は必ずしも必要とせず、したがって人間ばかりでなく動物にも共通に見られるものを言う（551）。

その第一のものが欲望（Appetite）である。欲望とはリードの定義によれば、ある特殊な種類の欲求であり、個体の保存と種の存続という生物にとっての二大目的に奉仕するために埋め込まれたものであり、次のような特徴を持っているものである。①欲望それ自体には不快な感覚が伴っている。②欲望は満足させられた後にも周期的に起こる。この例として挙げられるのは、飢え（Hunger）と渇き（Thirsty）と性欲（Lust）である。

この例を見ると直ちに疑問に思うことは、これらは、普通本能に分類されるのではないかということである。①も②も、いわば身体の機能に依存した生得的なものであるのではないかということである。性欲に根ざした行動は乳児には見られないものの、飢えや渇きはまさにこれ満たすことができなければ、生存することができず、乳児の生存を司っているのは本能だというのがリードの先の主張だからである。

以上の疑問に対するリードの答えは、欲望が意図を前提としているという定義に依拠するものである。すなわち彼によれば、欲望とはまさにその欲望の対象が行為主体にとって意識されているものに他ならない。性欲を例にとって見よう。身体の発育に伴ってある一定の年齢に達すれば、性衝動に伴う感覚をみな体験するようになる。これが①の不快な感覚である。しかし、これだけでは性欲にはならない。これが性欲となるのは、この不快さが、異性との性行為によって解消されるということを知って、その行為を欲望の対象として意図するということができるようになってからであるということになる。したがって、欲望とは、人間の自然本性に根ざしたものであるという点では、本能と変わらないが、自分が何をしようとしているかについての意識を持っているという点で本能と異なるのである。しかし、行為の原理として、本能と欲望をこのように区別することにどのような意味があるのだろうか。これは、一見したところ、つまらない問いのように見えるが、実は行為主体としての人間のあり方についてのリードの理論を理解するためには、重要な論点になりうるものなのである。

このことを理解するためには、まずリードの次の言葉を引いておこう。「これと同じ数の諸原理から、いやさらに多くの数の諸原理から、同じ行為がなされ得る。このことは大方の人間の行為について当てはまる。このことから、〔同じ〕人間の行為をきわめて異なる反対の諸

理論が説明するのに役立ち得るということは明らかである。〔この様な理論によって〕割り当てられた原因はその結果を生み出すのには十分であるが、しかし真の原因ではないということがありうる。(553)（〔　〕内は筆者による補足)」

すなわち、我々は同じ食べるという行為を、本能からも、自然的な欲望からも、あるいは別の欲求からも、あるいは健康への配慮という理性的原理からもなし得る。どのような原因から発したにしろ食べるという行為は同一である。

しかるに、行為についての道徳的判断は意図的行為についてのみ行われる。したがって、同じ行為でもそれが本能に発する行為なのか、欲望に起因する行為なのかでは、道徳的評価はまるで異なることになる可能性がある。またリード自身が述べているように、本能からの行為もそれに目的意識が伴うことにより、欲望に変わり我々の意図的な行為についての範疇に入ってくることになる。しかも、意図的な行為になることにより我々の自己統制（self-control）の対象になることにもなる。その意味では本能と欲望の区分は可変的でもある。

とはいっても、欲望はそもそもそれ自体では社会的でも利己的でもないと、リードは言う。社会的でないのは、そもそも他者は考慮の範囲内にないからであり、利己的でないのは、欲望の対象が我々にとって良いものか悪いものかという考慮に無関係に、欲望は我々を行為へと駆り立てるからである。それらが徳になったり悪徳になったりするのは、より上位の原理との関係で、決まるのである。これは動物的原理一般に当てはまる。しかし、そういう一方で動物的原理は我々の生の営みには必要不可欠であり、本来そのような役目を神から与えられているのだから、その意味では本来的には良きものである。このような点に、良いこと、利益になること、と善なることについてのリードの考えの一端が窺われるが、厳密な考察は後の論文にゆずることにする。

欲望と類似のものだが、リードの挙げた欲望の特徴とは少しずれるものとして、疲労による休息の欲求、それから逆に元気なときに何もしないでいることは、我々にとって不快であるので、何かの活動へと人間を駆り立てる活動性の原理（Principle of Activity）がある。両者ともに、身体自身の周期的な活動というよりは、さらに偶然的な事情に左右されるので、少なくとも周期的に起こるというものではない。しかし、生来植え付けられているという点では、欲望と同じである。ただ欲望と同じようには明確な対象を持たぬ場合も多いように思われる。

また、自然が与えなかった欲望を、人間が作り出し獲得するということもあると指摘する。喫煙や飲酒などはこれに当たるという。確かにこれらは、生存そのものには不可欠とはいえないが、先にあげた二つの欲望の特徴は備えている。これらを獲得欲望（Acquired Appetite）とリードは呼んで、それを一種の習慣によって生み出されるものとしているが、この点に関しては、必ずしも正しくないように思われる。喫煙や飲酒に限らず、我々が必要なものとして摂取する食べ物や飲み物、その他日常的な対象に対して我々が一種の特殊な執着を示すことは、何に限らずありうるからである。これらを単に反復の結果によるものと片付けることはできないように思われる。

先に述べたように、欲望それ自身は道徳的に良いものでも悪いものでもない。道徳的な善悪を司る、より上位の原理に一致するか否かという別の原理との関係で、善悪が定まるのである。しかし、その道徳的な善悪の評価とは別に、欲望は創造主によって定められた人間的自然として、つまり人間の生存に欠かすことのできないものとして、その存在自体は良きものとして肯定されているのである。

4

次にリードが挙げる原理は欲求（Desire）である。欲求は欲望とは「それぞれに固有の不快感がないこと、周期的にではなく常にあること、対象によって一次的に満足されることがないこと（554)」という諸点で異なる。しかし、これらの相違点はいわば欲求が精神にどのように現

れ、感じられるかという内在的特徴に関してのものであり、このような相違が何ゆえに生じるのかという点については、何も語ってはいない。これだけを見ると、欲求も欲望と同じく生物としての身体にその根拠を持つものかと思ってしまいそうだが、リードの考えは実際には全く違う。

彼が欲求として名を挙げるのは、力の欲求（Desire of Power）、評価の欲求（Desire of Esteem）、知識の欲求（Desire of Knowledge）である。これらは、いずれも生物としての人間の欲求、すなわち動物と人間に共通の欲求というよりも、優れて人間的な欲求であるように見える。動物にも類似の欲求があるにしても、これらを動物的原理に分類するのは何故であろうか、その点についての考察は後に回すとして、まずが欲求についてのリードの言を検討してみよう。

リードは力の欲求のあらわれとしては、他者に対する競争心や、社会的地位を獲得するために必要な諸性質を得ようとすることなどを挙げる。評価の欲求については、われわれが他者の評価をいかに気にして行動しているかを見ればわかるとする。知識欲については、高尚な学術的探究心から隣人の生活をのぞき見たいと考える愚かなものまで枚挙に暇がない。これらのことから、欲求が人間の行動においてきわめて重要かつ協力に作用していることは明白である。したがって、「これら三つが人間の構成の中にある自然な原理であることを示すために議論はいらない。(555)」と言う。では、これが自然な原理であるとはどういう意味であろうか。それは力、評価、知識、という求める対象が、そのものとして自然的に定まっていることを言うのであろう。したがって、これらの対象が人間に対して快を生むが故に求められるのであると考える人々、すなわち、これらの三つのものが快を得るための手段であるが故に欲求されるのだとする快楽主義者[7]は間違っているということになる。

これらの三つに対する欲求は時にきわめて強く、そのために通常の幸福や快を顧みないということは人間にはよくあることである。快楽主義者として知られるエピクロスでさえ、死後の名声を強く望んだとされる。これらの事柄は単に快の手段として、この三つのものが欲求されるのではないということを示している。

そして、このような欲求は欲望と同様にそれ自体としては善でも悪でもない。つまり道徳的観点からは評価の対象ではない。しかし、人間にとっての有用性ということから言えば、それらの与える害よりも益の方がはるかに大きく、基本的には人間らしい行為として是認されるべきものであるとリードは考える。

その有用性とは、これらの欲求が、人間が社会の成員としてやっていくにおいてきわめて重要であるという点に尽きる。社会が成り立っていくためには、その成員たる人間が社会の中で、少なくとも相当程度は規則に従って行動するということが必須である。道徳心のある人はこれに従って、行動するであろうが、常識的にいってすべての人に、常時道徳心に基づく行為を期待するというわけには行かない。徳を持たない人でも、他者の評価を顧慮したり、またこの様な他者の評価から生じる利害を考慮したりすることによって、社会的に有益な行動へと導かれる。また権力や名声や知識を得ようとすれば、それに向かう努力が必要とされる。すなわち、道徳的な行動をとる場合と同様に、自分の中にある様々な欲望や欲求を一つの方向へと向ける自己統御が要請されることになる。このような自己統御こそは、リードがその時々の最も強い衝動に従って動かされている動物の行動と、人間らしい行動とを分ける最も大きな要素なのである。

また、人間が社会化される上で不可欠の教育や訓練においても、これらの欲求が推進役となる。動物の訓練には、罰への恐怖が主要な手段であるが、人間の場合は野心や評価への欲求の方がより重要な手段である。

また先にリードはこれらの欲求自体は、善でも悪でもないと述べたが、実は本当の徳とは親和的であるとも述べている（556）。つまり、これらの欲求が人間を社会的にすることに貢献す

るのであれば、人間社会を律する道徳のあり方に類似するのは当然であり、またこのような行動形式に慣れ親しんだ人間が、道徳的に振舞うことはよりたやすくなると考えられるからである。

また、欲望に獲得欲望があったのと同様に、欲求にも後天的な獲得欲求（Acquired Desires）があるとして、その事例として金銭欲や、称号、土地などに対する欲求をリードは挙げる。もちろんこれらはそれなりに有用である限りにおいて欲求の対象となる。しかし、それがそれに見あう力や評価への欲求と離れ、それら自身が力や評価という本来の目的を得るための手段ではなく、自己目的化した場合獲得欲求となる。金銭や称号や土地、などは、それら自身が人間の自然本性に植え付けられている欲求の対象とは考えられず、現実の社会における役割の有用性において、力や評価と結びついている。したがって、そこから離れてそれのみが欲求の対象となるなら、本来的な欲求の持っている人間の存在にとっての有用性とはまるで縁のない無用な欲求となるのである。したがって「我々の自然な欲求は、社会に対して高度に有益であり、徳に対する助けにもなるが、獲得された欲求は無益なばかりでなく、有害で恥ずべきものとなる。(557)」

さて、リードは何故このようなきわめて人間的といってよい欲求を動物的原理の中に入れたのであろうか。動物の中にも、これに類する欲求を持っていると考えられる場合も確かにあるであろう。しかし、それらは動物界全体からすれば少数であろうし、またその程度もはるかに弱いものであろう。動物的原理の一つの基準である動物と共通に持つ原理とは言いがたいものであるということになる。であるとすれば、これらの欲求が動物的原理といわれるのは、人間という特殊な動物の自然本性に埋め込まれているという点に求める他はない。事実リードはこれらの欲求を以って「社会生活のために意図されていることは明らかである（557)」という。この判断が妥当であるかはともかく、リードが動物的原理という場合には、人間という動物の特殊性が含まれていることは明らかである。そして、これらが人間的でありかつ動物的であるという性格を併せ持つとすれば、それは一つには理性という人間の能力との対比ということがあると思われる。また同時に、それらの欲求は人間の基本的な条件として与えられたものであり、それらを追い求めること自体には人間の意志が及ぶものではないという判断が含まれているように思われる。したがって、動物的原理を明らかにしていくことはまさに「人間の本性」を明らかにしていくことになるのである。この点は、次節以降の様々な対人間に対する行為の原理の考察に加え、動物的原理と理性的原理との対比によってさらに明瞭になるであろうと思われる。

5

欲望や欲求は、それ自体としては善でも悪でもない、また利己的であるとも社会的であるとも呼べないと、リードは言う。それらは人間をその目的として持たないからであるというのがその理由である。欲望の場合は、生存や種の存続のために必要な対象であり、確かにそれ自体としては人間を対象としていない。性欲の場合は人間を対象とするが、それは人間の身体であって人格ではないということが可能であるだろう。欲求の場合は、力や評価は本質的に他者との関係を含んでいるではないかという反論が可能だが、本来的には自分のある状態を欲求の対象にしているのであって、他者との関係は間接的なものに過ぎないとリードなら答えるであろう。

そこで、次にリードが考察の対象とするのは、人をその直接の目的とする行為の原理である。人をその直接の目的とするということは、この原理は本質的に他者に直接働きかけ影響を与えるものである。人間が社会的な動物であり、しかもその社会性は、具体的な個人にあっては、まさに特定の個人に対する個別的な関係に実現する。言い換えれば、社会的な動物である人間にとって、生きる上できわめて重大な要素が特定の個人と取り結ぶ様々な人間関係であるとい

うことである。このような行為の原理を、リードは一般的に「感情（Affection）」と名づける（558）。これは他人に対して好意的、すなわち他人に対してよい行為をなしたいという欲求と、悪い影響を与えたいという欲求を生み出す原理の双方を含んでいる。

このように分類された感情はあくまで、行為の原理という側面でとらえられたものである。この点をヒュームの情念論との対比で説明してみよう[8]。ヒュームは情念を「直接情念」と「間接情念」にわける。単純化を恐れずに言ってみれば、直接情念とは欲求や欲望の達成や達成可能性に対する情緒的な反応である[9]。もちろんそのような情念が何らかの行為を引き起こすことはあっても、それ自体が本来固有の目的、対象を持っているわけではない。その意味ではまず「直接情念」はリードの行為の原理の中には入ってこないのである。したがって、リードの「感情」に当たるのは、「間接情念」ということになる。しかし、ヒュームが間接情念としてあげた四つのうち、自己を対象とする「誇り（Pride）」と「卑下（Humility）」はヒュームによれば、純粋な情動であって、欲求は含まないとされている。実際にはこれらの情念が引き金となって様々な行為となるはずであり、その点では、リードの挙げる力や評価に対する欲求と重なることが多いと思われるが、ヒュームの説明では「誇り」や「卑下」それ自身の中には、欲求すなわち人を行為へと導くものは本質的な形で含まれているわけではないのである。また同様に他者をその対象とする「愛（Love）」や「憎しみ（Hatred）」でも、ヒュームは他者の幸福や不幸を欲求する部分は、愛や憎しみとは分離可能であり、愛や憎しみの本質ではなく、愛や憎しみの本質は基本的には誇りや卑下と同質のものであるというのである。つまりヒュームにとっては、情念とは一種の感受的な反応を第一義的には指すのだが、リードにおいては、第一義的には行為の原理であるということが重要なのである。

しかし、また同時にリードの論述にはヒュームを意識していると思われる箇所も多く、共通点もまた多い。その点を考慮しつつ、リードの言う対人間についての行為の原理である「感情」についてみていこう。

「感情」の原語であるaffectionは通常の用法では、愛情や好意といった訳語を当てるのがふさわしい使われ方をする。したがって、感情や情動一般を表す名辞としてはemotionやpassionを使うのが通例である。あえてリードがこの使用を避けている理由は定かではないが、前述のように行為の原理という側面を中心に考えていることと無関係ではあるまい。ともかく、それ故に行為の目的である他者に対して有利な働きかけをするような行動の原理である「好意的な感情（Benevolent Affection）」と、逆に不利な働きかけをするように人を動かす「悪意の感情（Malevolent Affection）」とに分類される。

まず好意的な感情についてだが、個別の感情を取り上げる前にリードは全てのこの種の感情に共通している点として、二つの点を挙げる。一つはこれらの感情は、この感情を持っている当人に対して快いということであり、もう一つは対象となる人間の善と幸福を欲求するということである。前者の点に関しては、「全ての好意的な感情はその本性上心地よい。善なる良心、それに対して、これらの感情は親和的であり、敵対することはあり得ないが、その心についで、これらの感情は人間の幸福の主要な部分をなす（559）。」を原理として、述べている。単に快いというのみならず、人間の幸福な生にとっての重要性を極めて強く強調している。まさにこの点が、単なる好悪、好き嫌いと区別される点となる。たとえば、相手が無生物の場合、そもそも幸福や不幸になる能力を欠いているのだから、それに対して感じることは「感情」ではなく、単なる好き嫌いということになる。したがってこのことは対象が人間の場合も当てはまり、もし、相手の幸福や不幸に対する欲求がないのであれば、それはリードの意味での「感情」ではなく、単なる好き嫌いということになる。もっともリードの趣旨は、人間を対象にした好悪の感情は必然的に相手の幸福や不幸に対する関心を含まざるを得ないという主張である

という可能性もあるが、それに関してはこの部分だけでは判定できない。

また、この好意的感情において、我々が他者の幸福を欲求するのは、もう一つの要素である心地よさの故ではないということ、すなわち、この利他的な欲求はそれ自身独立な要素であり、自分の快を得るための手段としてあるのではないという主張がなされる。このことを否定するもの、すなわち我々が他人の善を欲求するのは自分の善や快を引き起こすためであるという哲学者はもちろん存在するが、これはリードの言う意味での好意的感情の存在自体を否定するもので、全てを自己愛に帰着させる立場であるということになる。リードはこの立場を直接具体的に批判することは避け、このような説は、欲望である飢えや渇きを自己愛に帰着させるのと同様に不合理であると思われると述べるに留めている（560）。

この主張は、このような人間にとってきわめて重要なしかも人間的である感情を動物原理として分類していることに対する理由についての一つの示唆を与えているように思われる。それは、以下のような理由による。飢えや渇きが我々の自己の保存というそれ自体は利己的な目的を持っているということは誰しも認めることである。リードもそのことを認めたうえで、これは自己愛に発するものではないという。その理由はまさにこれらの欲望が動物的原理であるということ、すなわち、我々の自然本性に植え付けられたもので我々の自由になるものではない言うことによる。したがって、リードが自己愛というときには、そこには単に自己の利益を目的としてという意味だけでなく、自己の利益を自分自身が意図的に図ってという意味が込められているということになる。先のリードが反論しようとしている論者たちが、このような意味で「自己愛」を使っているかどうかは、疑問であるが、リードがこのような意味でこの語を使っているのは間違いない。つまりその意味で自己愛とは、結局において、リードによれば理性的な原理ということに他ならない。そして、人間の本性に発するものとしての感情はたとえ、それが極めて人間的な、動物とは共有しているとは思えないような感情であるにしても、理性的な原理とは異なり、人間の自己統制ということの範囲を超えた自然本性的な部分に根を持つという意味で、動物的原理ということになるのであろう。そして、善意の感情は、人が他者と共有するということで、社会全体の善と幸福を増進させ、人々に喜びを与えるものであるから、社会の存続にとって不可欠のものであるが、それは個々人の快楽の最大化というような原理に従って、計算によって動くものではない故に、理性的原理ではないのである。

6

以上の一般的な考察の次にリードは個別的な好意的感情を例示してゆくので、それらについて簡単に触れておこう。

リードが挙げているのは次の7つである。①親子や近親者（parents and children and other near relations）の間の感情　②恩人に対する感謝（gratitude to benefactors）③不幸な人に対する哀れみと同情（pity and compassion towards the distressed）⑤賢人と善人に対する尊敬（esteem of the wise and the good）⑤友情（friendship）⑥両性間の愛情（love between the sexes）⑦公徳心、すなわち自分が属している共同体に対する感情（public spirit that is an affection to any community to which we belong）それぞれについて細かな論評をすることは紙幅の関係から差し控えておくが、リードが考えている内容はわれわれが常識的に考えているものと大差がないと考えて差し支えない。ただ注意が必要なのは、これらの感情をそれぞれ独立した原理であると考えていることである。先にヒュームの「間接情念」との比較を試みたが、ヒュームで言えばこれらの好意的な感情は「愛」のカテゴリーに入るものであろう。そして、ヒュームも同様に愛の中に様々な下位区分を含めており、リードと共通しているものも多いが、基本的には、全てヒュームの提示している印象と観念の二重の連合という因果的構造を共通としてもち、様々な条件によってその発現の形に違いが生じ

ると考えられている。リードはヒュームの主要な目的である感情の発生の因果的メカニズムという問題には関心がないので、このような違いが生じるのだ、と単純に考えておくこともできるが、少なくとも潜在的にはそれだけではない要素も持っている可能性がある。すなわち人間の本性と呼ぶべきものの範囲をどの程度におくかという問題である。リードは我々の感情の様々なあり方のかなりのものを、そのまま独立の行為の原理としてみる。すなわち、我々の感情のあり方をかなり広く自然本来のあり方として認めるということになる。一方、ヒュームは、実際の感情のあり方の区分などにおいてはリードとさして異ならないが、種々の感情の背後に同一の因果的メカニズムを置くことで、現状の感情のあり方を必ずしも人間本性のあり方として認める必要はない、つまりわれわれの理解からすれば、きわめて異様な感情を持つ文化や社会や個人であっても、ヒュームの描く同一のメカニズムによって説明できる可能性を残しているのである。その点において、実はより広い感情のあり方を人間本性の発露としてみることが出来るように思われるのである。もちろん、この一点を取って、リードの理論の不備を言うことはできない。なぜなら、このような感情の独立性を言うとき、彼が批判の念頭においているのは、このように感情のメカニズムを置くことで、全ての感情や道徳を、快苦や利己心といった単一の原理の下で説明してしまおうとする、ヒュームの説明の射程そのものにあるという可能性もあるからである。いずれにしろこの問題はさらに、理性や道徳論を問題にする場合にもまたあらわれることになるであろう。

リードは、さらに一般的な考察を幾つか付け加えているが、そのうちで重要なものは行為の原理はそれぞれ程度の異なる尊厳を持ち、我々はそれらを評価する上で上下関係をつけるということである。すなわち、本能、習慣、欲望には尊厳を認めず、知識や力に対する欲求にはある程度の尊厳を認める。そして好意的な感情においては、尊厳があると同時に愛すべきものでもあるというのである。そして、もちろん感情の中にも尊厳の程度があるという。家族への愛よりも共同体への愛のほうが上であると考えるのである。もちろんこれらは、リードの考える評価を反映したものではあるが、しかし、何を根拠にこのような評価を下すのかという問題は残る。これらについての評価そのものも自然本性的に与えられているのか、それとも、リードの理論的観点からの評価なのか、明らかではない。もちろんリードの立場からすれば、自然本性の評価と理論的観点からの評価は基本的に一致するものと考えられていて、特に区別する必要のないものかもしれないが、それにしても、問題は残るといわざるを得ない。

7

悪意の感情についての考察に移ろう。これまでみてきたように、動物的原理は、すべてそれ自体としては我々にとって有用であり、それがその本来の範囲を逸脱して、上位の原理の障害となるときにのみ、悪となるものであった。一方悪意とは我々にとっては否定的な評価を与えられるものである。したがって、もし、悪意なるものが存在するとすれば、これまでとは異なり、それ自体からして有害な行為の原理を我々は自然本性的に有していることになってしまう。しかし、もちろんこのような考えを、リードをとらない、創造主が、我々の自然本性に組み入れているとするなら、それは本来的に我々にとって有用なものでなければならない。したがって、通常悪意とされる事柄も、他の動物的原理と同様に本来は有用であり、それが逸脱したときのみ悪意と呼ぶことが適切なものであると考えるのである。このような考えは、たとえば、ヒュームが共感の原理を重要なものとみなす一方で、比較によって、たとえば他者の不幸を喜ぶというような悪意を人間のあり方に認めていることからすると大分に楽観的にすぎるところがあるように見える[10]。リードには人間の利己心を様々な人間の営みの中心におくという思想の流れに対抗しようとする姿勢が強いあまり、人間の善性を信じすぎていて、人間存在の実相をとらえ損なっているように思われる。

ともかく、このような悪意の感情として、リードが挙げるのは次の二つである。

第一は競争心（Emulation）である。何かの目的を追求することにおいて、人は競争相手に対して優越することを欲求し、また凌駕されることに対して不快を伴う、とリードは言う（566）。そして、この追求される目的はきわめて多種多様であり、とにかく一般に人に評価されるあらゆるものがその主題となる。リードは既に、力への欲求という形で、きわめて類似しているように思える行為の原理を認めている。また同様に評価への欲求も、評価が多くの場合他者との比較を含むものである以上評価の欲求とも極めて近い。このようなものを独自の行為の原理として認めなければならない理由はどこにあるのだろうか。もちろん、定義上、競争心は競争相手に対する感情であり、後の二者はそのような顧慮を含んではいない。しかし、リードが強調するように、この競争心が健全な範囲内で収まっているときには、行為の原理としては他者に対する直接の行動を生むものではない。この点で、好意的感情とは全く異なる。好意的感情はそもそも他者の善幸福を目指す行為を生むという点で他者を対象としているが、競争心はそうではないのである。したがって、現実の行為としては、健全な範囲内で統制されている場合には、競争心による行為も、力や評価の欲求による行為も区別がないことになるのではないかと思われる。したがって、リードの意図は、やはり本来的な悪意の感情である、妬みなどを、適切な範囲内であれば、有用であり悪ではないような行為の原理の逸脱例として説明したいということではなかっただろうか。なぜなら、彼にとっては、人間本性は基本的には肯定されるべきものであり、したがって、そこに存在する悪の要素は、全て本来的にはよきもの、有用であるものの逸脱であると考える必要があったからだと考えられるのである。この事情をもう一つの悪意の感情である憤り（Resentment）においても検討してみよう。

憤りとは、我々が害を受けたときに、その害を起こした相手に対して、仕返しを果たそうとする気持ちになるが、その気持ちのことである（568）。ジョゼフ・バトラー[11]はこれを、あらゆる種類の害に対して我々の自然の構成から起きる、盲目的な衝動である瞬間的な怒りと、単なる害ではなく不当な害である危害（injury）によって起こる思慮のある怒りとの区別をしているが、それを、リードも認める。単なる害と不当な害である危害の区別を行うのは理性であるので、当然この区別は我々の理性を前提とする。その限りにおいて前者を動物的な憤り、後者を理性的な憤りと区分することも可能である。前者については、これは基本的には我々の自己保存のために本性に備わっているものであると考えられる。害が加えられた時に、我々は、害から身を守ろうとすると同時に、加害者に対して攻撃を加えようとする。人間全てがこのような行動をとることによって、相互に相手を攻撃することに対しては抑制的となることが期待できるというわけである。しかし、一方で、実際に害が起きて、仕返しの応酬がおき、敵を殲滅するまでやまないということも、統治社会の形成されていない人間の自然状態においては十分ありうる事態である。統治社会においては、このような不都合が生じないように、各自が復讐の自然権を放棄して法や裁判所に復讐を委ねるようにしている。これは大きな政治社会の利点であるとされる。それだけでなく、この様な段階において、動物的な怒りと理性的な怒りが区別される。理性的な怒りは、法や正義にのっとる形で相手の不法行為に対して攻撃するのである。このような意味での正当な怒りとそうでない怒りの区別が、統治社会の成立とともに生じるのか、それともそうではなくて、本来理性の使用だけでその区別がつき、統治社会の成立は単にこの区別が実効あるものとして働く条件が整ったということに過ぎないのかは、ここのみでは十分に判定できないが、理性についての考えからすれば、おそらく後者がリードの考えであろうと思われる。このような考えはロックの統治論[12]に近いものであるように思われる。

そしてこのように正義や法などの観念に結びつくところで、憤りは単なる競争心とは区別さ

れる。また、競争心と異なり、最初から行為の原理としては他者を対象としている。しかも、他者への害がそれによって引き起こされるわけだから、まさに悪意の感情というにふさわしい。しかし、一方、自然本性上の重要な役目を担うと同時に、行き過ぎた場合には、人間の統治社会建設への機縁ともなるという役割を担っている。しかも、理性や正義の観念と結びついて、他者への正当な攻撃という形での正当化の道も開く。社会を維持していく上での不可欠の要素として認められることになる。その意味では、競争心と同様、人間本性への全面的肯定というリードの枠組みに収まることになる。

だとすれば、好意的な感情と悪意の感情の違いは何か。悪意の感情といえども、単に他者に対して害意を持つとは必ずしも限らないのであるなら、このことが問題となるであろう。リードの答えは、要するに、好意的な感情は総じてそれを所有している人間に対して快く、悪意の感情は、それが適切な場合でも、不快でいらだたしいものであるというものであり、すなわち精神にとっての感じられ方の違いである。この点をとらえて、前者を人間の精神にとっての日々の糧、後者を必要のある場合にのみ使う劇薬に例えている。リードのこのような論述は、先に述べた彼の論述全体の枠組みにはふさわしいものではある。しかし先に述べたように、本当に人間には他人の不幸を喜ぶような本性的な悪意が備わっていないのかどうかという点については、リードの見解は楽観的にすぎるといわなければならないであろう。

8

行為の原理としての動物原理として、リードが枚挙するのは以上で全てであるが、彼はさらに、このような動物原理に対して影響を与えることによって、人間の行動に大きな影響を与えるものとして、情念（Passion）、気分（Disposition）、意見（Opinion）の三つを挙げて考察している。以下簡単にこれらのものを検討してみよう。

まず情念であるが、リードによれば、この語は必ずしも確定された意味を持って使われているわけではない、ただ、情念の結果として、精神が極めて興奮した激しい状態に置かれるということが共通しているだけである。リードが自説の展開において常に念頭においているヒュームの「情念」の用法については次のようなことを述べている。すなわち「ヒューム氏は人間の精神における全ての行為の原理に情念という名前を与えている。そして、この帰結として、全ての人は自分の情念によって導かれているし導かれるべきであるということ、理性の使用は情念に従属的であるべきことを主張した。(571)」ところが、この叙述は少し正確でないところがある。確かにヒュームは行為の原理を情念としたが、情念自身は、リードが行為の原理としてあげているもののように雑多に考えられているわけではなく、日常的に我々に現象しているものに対して自らの観念の理論において統一的な地位を与えているからである。さらに言えば、ヒュームは行為の原理に情念という名前を与えているわけではなく、情念に対して行為を生み出す力を与えているのである。そう理解してこそ、「理性は情念の奴隷である」というヒュームの言葉が有意味になるからである。確かにヒュームの「情念」の用法は、日常語の用法から見れば誤用ということになるが、それだけでは、ヒュームの情念に関する議論を批判したことにはならない。この点についての検討は、情念と理性の間の関係についての両者の関係を、意志についての考えとあわせて検討して見なければならない。

ともかく、リードは、日常語の用法に習い、行為の原理のうち、精神に大きな動揺を与えるほど激しいものになったものを情念と呼ぶことにするという。したがって、情念とは特別な種類の行為の原理ではなく、任意の行為の原理のある状態を指すということになる。情念を行為の原理の枚挙とは別扱いにする理由がここにある。そしてこのような、情念についての一般的考察をいくつか行う。

第一は、情念が我々を悪へと誘惑する傾向を持つということである。これゆえに、古来より

主題となっている理性と情念の戦いという現象が見られるという。リードによれば、冷静に悪を選ぶということはなく、理性を盲目にする情念により人間の悪への道が開かれるのだという。

第二は、情念は悪いものと同様に良いものへも向かうということである。これは情念の定義が行為の原理が激しくなったものと言うことからすれば当然のことであるが、ここには、リードが情念に対して抱いている二つの相反する見解があらわになっているように思われる。すなわち、リードは情念に対して理性を擁護するという立場から、否定的見解を持つと同時に、人間本性に対する全面的な肯定という立場から擁護しようとする肯定的な見解を持っている。特に次の観察において、その相反する側面が現われているように思われる。

第三に、情念の結果は、全く非自発的で、我々の能力の範囲内に入っていないものと、自己統御を行使することによって、その結果が生じることを妨げることができるものとが区分でき、前者は有用で、後者が悪いものであるとされる。この区分は、これだけを見れば、種的な区別のように見える、すなわち情念のうち良いものと悪しき物が存在し、それの特徴が、コントロールできるかできないかということであるように見える。それ故、この辺りの論述には、情念が人間の生に対して果たす様々な役割が特に整理されるわけでもなく、雑然と述べられている。しかし、一方で適切な範囲内の情念は人間にとって有用であるが、激しい情念は行為の悪を軽減し、それが抵抗不可能であれば、罪をなくす、という自由意志との関係において、上記の区分が成立すると言う。すなわち、この区分が情念自体の種類には関わらないかのような書き方をしているのである。まさに、このことにリードの持つ情念に対するアンヴィバレントな見方が現われているといってよい。そもそも、動物原理の激しくなった場合というだけなら、それ以上詳しく取り扱う必要はなかったはずである。

次に気分だが、これは、様々な動物原理のうち、ある特定のものに動かされやすい精神の状態を示す。これらは、変化することがある。たとえば、善意の感情同士、悪意の感情同士には一種の自然な親和性があり、これによって相互的に連合するということが起こる。すなわち上機嫌（Good Humor）と機嫌の悪さや、高揚（Elation）と憂鬱（Depression）などの場合であるこれらは、身体の状態や、外的な幸、不幸などによって引き起こされることがある。いずれにせよ、これは行為の原理と行為をあるいは外的な事情と行為の原理とを単純な因果関係によって結ぶことが難しいということを示している。つまり、人間はその時々の精神のあり方の全体から規定を受ける存在であることを示している。リードの議論は、精神の諸作用を考えるときに見逃すことのできない現象を抑えているのだが、このこと事態を彼の心の哲学の中でどのように位置づければよいのか、それに対する展望は示されていないと、言わざるを得ない。

最後に、取り上げているのは意見である。その理由は、動物的原理のうち身体的な状態を基礎にしている欲望を除けば、とりわけ対人間的な感情の場合には、意見を基礎にしている場合がほとんどだからである。情念、気分、意見は、それぞれ動物的原理のあり方に大きな影響を与えるものであるが、意見が最も人間的なものであるということは言うまでもないことである。これは、リードが、動物的原理には意識とある程度の知性が必要であるといっていることと符合する。とりわけ、人間の場合にはこの部分が重要であるということは当然である。しかし、それならば、知性ないし理性的原理として意見を取り上げないのは何故だろうか、それはまさに我々の意見が理性的であるとは限らず、多くは他人からそのまま受け継いだものであるとリードが考えていることに由来する。しかし、そうであるならば、リードの考えていることは、ヒュームの考えていることと大差がないことになる。ヒュームはまさにこのような形で信念を自分の精神の諸作用に対する因果的説明の理論の中に取り込んでいるからである。この問題は、何度も繰り返して出てくるリードとヒュームの共通点と相違点とはなにかという問題に他なら

ない。動物的原理によって人間が動かされているという点に関しては、両者は共通する。しかも、この動物的原理の区分の仕方にも明らかな共通点が見られる。そして、人間の知性の産物でもある意見（信念）に対して一種の因果作用を認めているということにおいて（もちろんリードはこれを因果性とは呼ばないが）共通している。したがって、この話は、リードによって動物的原理とその上位の原理である理性的原理がどのように区分されて考えられているか、さらにはそのことと、意志による行為の決定（リードによれば真の力）との関係がどのように考えられているかを考察の対象としなければならない。このことを確認して、行為の原理としての動物的原理についての考察はひとまず終えておきたい。

注

1　石川　徹「トマス・リードの心の哲学（3）―意志について―」香川大学教育学部研究報告第一部　第123号

2　Cf. John Locke, *An Essay concerning Human Understanding* BookⅡ, §21 "Of the Idea of Power"

3　主体者因果説の提唱者は結局において、物質の間の因果性と人間の意志に発する因果関係の二種類の因果性を認めることになるのがほとんどである。リードもその表現においては主体者因果のみを認めているが、実質的には2種類の因果を認めているのと同じではないかという疑念である。

4　リードの著作はすべて*The Works Of Thomas Reid,* ed. By William Hamilton 6th edition、Edinburgh 1863をThoemms Pressが1994年に復刻出版した版による。また以下特に断りのない限り、括弧内の数字はこの本のページを示している。

5　ヒュームの共感は本来的には他者の情念の観察から、自らの精神にも同じ情念が生じるメカニズムの事をさすが、ヒュームが情念（Passion）と意味の重なる語として使用する気持ち（Sentiment）には明らかに意見（Opinion）の意味も含まれて使用されている。したがって、他者の信念の感じも同じく共感のメカニズムによって伝達されると考えることが妥当な解釈であろう。

6　このような知性論における両者の説明の類似性に関しては　石川　徹「トマス・リードの心の哲学（1）―知覚について―」香川大学教育学部研究報告第一部第95号を参照せよ。

7　リードが念頭においているのは、快楽を以って善の定義を行おうとするエピクロス主義者というよりは、人間の精神の全ての諸作用の原理を、快を求め、苦を避けるという一つの原理で説明しようと考える人々のことである。

8　ヒュームの情念論に関する一般的な説明は　石川　徹「ヒュームの情念論」（『ヒューム読本』中才敏郎編　法政大学出版局　2005年所収）を見よ

9　「希望（Hope）」や「恐れ（Fear）」「喜び（Joy）」や「悲しみ（Grief）」である。David Hume, A Treatise of Human Nature, BookⅡ, Part3 §9 "Of the Direct Passions"（1739）

10　David Hume, op., cit. BookⅡ Part2 §8 "Of Malice and Envy"

11　Joseph Butler（1692－1752）英国の道徳哲学者、自然神学者

12　John Locke, *Two Treatises on Government*